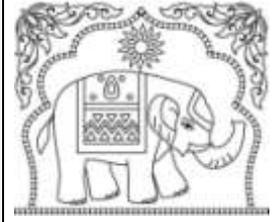




まいとりに मैत्री

No.18 平成 24 年度 秋号 -2012. 10. 17-
東洋大学仏教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌



< मैत्री > :maitrī (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。
仏教では慈 (いつくしみ)・悲 (あわれみ)・喜 (よろこび)・捨 (とらわれない心) という四つの広大な利他の心 (四無量心) の一つです。

《BDK シンポジウム『問われる仏教 応える仏教』に参加して》

9 月 3 日、仏教伝道協会に於いてシンポジウム『問われる仏教 応える仏教』が開催され、東洋大学仏教青年会のメンバーと共に参加させて頂きましたので、その様子と考えさせられたことを少しばかり報告させていただきます。

パネリストは釈徹宗氏、阿順章氏、池口龍法氏、松山大耕氏の四名で、認知症高齢者の為のグループホーム経営や坐禅会の開催、「フリースタイルな僧侶たち」というフリーマガジンの発行など、現代の仏教のあり方とアプローチ方法を思索し実践する現代仏教の最前線で活躍する僧侶の方々でした。



それぞれのパネリストの口から出てくるのは、激しく変化する社会、そこから派生する多くの問題に寺々が対応出来ていないという現状です。この現状を打開するにはどうしたらいいのか。僧侶自身の対話能力を育てる、儀礼などの形骸化を認識する、或いは公共性を高めて仏教信者と寺との接点が墓しかないという状況を変化させるという方法などが挙げられる様です。パネリストの方々の行う坐禅会や写経会の実施やコミュニティ形成、フリーマガジンの発行などは寺を広く世間に関く活動の一環だと言えます。

様々な問題の指摘や提言がありましたが、その中でも特に印象に残ったのが松山大耕氏の、「日本の最先端は沖縄である」という話です。その理由として、沖縄には檀家制度が無く、僧侶の人柄や力によって寺の評価が決まるということが挙げられていました。

毎月送られてくる雑誌の中で自分に興味があり、惹かれる雑誌を選択して読むことが出来る。そして、選択が難しいという人にはその人に合った雑誌を一緒に探してあげる。この様な形であれば、仏教という雑誌は広く、長く読まれ続けるのだらうと感じました。

藤井明(大学院インド哲学仏教学専攻 博士前期課程 1 年)

【目次】

BDK シンポジウム報告	……1	興福寺の羅漢供	……2
「サンギーティの会」活動報告	……3	韓国滞在記③	……3
モンゴル仏教文化圏の諸事情④	……4	タイの仏教事情⑩	……5
カラリパヤットゥ公演	……6	コラム「日本文化と仏教」⑮	……7
書籍・イベント情報	……9	今後の予定	……10

《興福寺の羅漢供》

「帰命頂礼大羅漢 十六尊者は大福田 釈迦の附属を受けてこそ 世間に現住し玉え 東西南北好みにて示すに処を定めつつ 天上人中遍くも 人法守る誓いあり 仏日沙羅に入りしかば 世間も闇になりにけり 法音提河に咽びてぞ 衆生の潤い尽きにける 金口の遺勅受けしとき 滅後の御法を預かりて 永く滅度を取らじとぞ 各誓いて去り玉う 頼みし能仁世を去りぬ 母なき犢子に異ならず さりとて末世の衆生をば 誰かは哀れみ助くべき 禅定室に静まりて 利生の床に遊びつつ 本誓悲願かえりみて 神通寿をぞ延べてける 仏は我等を附属して 肯う声を聞きしかば 無余に遊ぶ思いなし 争でか遺勅あやまらん 凡そ遺誠重きゆえ 又は悲願ふかければ 恋慕の室には影やどし 恭敬の園には色現ず 法性空の満月は 清く晴れて高けれど 勸請心の水すめば 浮かまぬ事ぞなかりける 都て諸余の羅漢は 仏勅なければ皆去りぬ 殊に十六尊者こそ 好みて利益を垂れ玉う 迦葉尊者は鶏足に 袈裟を捧げて隠れにき 常随給仕の阿難は 恒河に去りて又みえず 商那和須の賢きも 法と共にぞ隠れける 思えば十六阿羅漢の 利益に増れる事ぞなき 双樹の枯れし夕べより 龍華の開けん時まで 如来の正法絶たじとぞ 附属を受けて誓いてし 稽首十六大羅漢 我が此の一句の称讃に 三明果徳あらわれて 弥々利生を添え玉え 一文一句を誦持するも 皆是れ弘教の数ぞかし 況んや一代聖教を 読誦解義の力をや 願我生生見聖衆 世々恒聞深妙典 恒修不退菩薩行 疾証無上大菩」

(※旧字、送り仮名、歴史的仮名遣い等、筆者修正)



興福寺本坊 持仏堂 (外観)

上に挙げた文章は興福寺のお盆の行事「羅漢供」で唱える和讃です。興福寺では亡くなった方の追善供養や年忌法要などにもこの羅漢供を行う習慣があり、明治時代以降、お盆には先徳供養としてこれを行なっています。興福寺本坊の持仏堂において行われ、このときには本尊聖観音の厨子の前に十六羅漢の掛図をかけ、先徳の御位牌を置いて供養の対象とします。お供え物は一般的なお盆のお供えとあまり変わらず、スイカ、素麺、干し椎茸などの乾物、麻柄箸、また、興福寺の法要ではこのときのみ、お茶を淹れてお供えします。法要の最初に「合掌跪長」と言っ、膝立ちで合掌して釈尊、菩薩、十六羅漢とその眷属、そして諸先徳の降臨道場を願う文を唱えた後、導師が祭文を読み上げます。その後、冒頭に掲げた和讃を唱え、最後には「南無釈迦牟尼仏」と21回宝号を唱え、回向文を読むという次第になっています。

ここで供養の対象となっている十六羅漢について、羅漢というと大乘仏教一般では自利のみを完成させ、無余涅槃に入る聖者のことですが、十六羅漢は上の和讃のとおり仏勅、すなわち仏陀釈尊の指示によって、涅槃に入ることなく我々を導いて下さると言われています。「双樹の枯れし夕べより 龍華の開けん時まで」というのは、沙羅双樹の間にて涅槃に入られた釈尊と、遠い未来に竜華樹の下で覺りを得て仏陀となる弥勒との間、二仏中間の無仏時代を指しています。一般的に、この無仏時代に我々を救ってくださるのは地蔵菩薩の役割だとされていますが、ここではその働きを十六羅漢も持っていることが示されています。ですから、いわゆる小乗の聖者としてではなく、菩薩と同じような存在として扱われ、供養の対象となっているのです。

ところで興福寺で日常お唱えする經典に(性格には論典ですが)世親作の『唯識三十頌』があります。この中に「阿羅漢」という言葉が2回出て来ますが、ここでの阿羅漢という言葉は「我執を捨てた段階の者」を指していて、通常の意味の阿羅漢に加えて、十地の第八地以上の菩薩も含むとされています。

ところで興福寺で日常お唱えする經典に(性格には論典ですが)世親作の『唯識三十頌』があります。この中に「阿羅漢」という言葉が2回出て来ますが、ここでの阿羅漢という言葉は「我執を捨てた段階の者」を指していて、通常の意味の阿羅漢に加えて、十地の第八地以上の菩薩も含むとされています。



興福寺 持仏堂 (内部)

羅漢信仰は中国において盛んになったと言われていました。十六羅漢の掛図を見ると、眉毛が地につくほど長い人物や長いひげを蓄えた人物が描かれており、道教の仙人信仰の影響を窺うことができます。

以上、興福寺の羅漢供と阿羅漢の扱いについてのご紹介を致しました。興福寺の羅漢供は決して大きな法要ではありませんが、興福寺・法相宗の信仰の多様性が窺える非常に興味深い法要になっています。

板野弘映（仏教会会員 興福寺僧侶）

《小さな仏教国際交流を実現する「サンギーティの会」活動報告》

秋たけなわとなり、仏教青年会・仏教会の皆様にはますますご健勝のことと存じます。昨年末、「まいとりの」冬号にて「世界の般若心経を聴く」DVD 完成のお知らせをいたしました。今号ではその後の活動報告を致します。

本年よりは、活動拠点を京都に置き、スタッフ 2～3 名と共に、仏教国際交流の場を創設しています。具体的には①2月に寺院見学会（妙心寺・仁和寺へ。7ヶ国 16人参加）②4・7月に交流会開催（国籍宗派を超えた「祈りの時間」と「意見交換会」実施。毎回 4～5ヶ国参加）③5月に滋賀県の寺院法要に開催協力（留学僧の出仕を紹介）④9月に「ブータン仏教研究者を囲む会」（6名参加）等の行事を致しました。

こうした活動の中で、いちばん手応えを感じているのが「意見交換会」です。この会は、前仏青会長で仏教会会員の板野弘映師のご協力を得て開催しています。国籍・宗派を超えた仏僧の方々が熱心に討論をして下さり、4月は「戒律」、7月は「瞑想」がテーマとなりました。討論は毎回録音して原稿化し、後日、恩師や参加者にお送りしています。この作業は苦勞が伴いますが、皆様が関心を持って原稿をお読みくださることや、私自身の勉強になることは大きな喜びです。

寺院法要に留学僧を招くお役目も、有り難いことです。今年は佛教大学在学のモンゴル僧の方を、観音正寺様にご紹介しました。当日は在家の役員の方が大勢準備を手伝っていましたが、モンゴルの方がとても驚いていました。現地のお寺は完全自律制で、信徒が法要の手伝いをするのではないそうです。「この習慣はいいな」とおっしゃっていました。これは一例ですが、異なった仏教文化を体験することは自国の文化の特色や成立要因を考える機会につながり、それが帰国後の宗教活動のヒントを生み出すこともあるでしょう。

日本の仏教国際交流の歴史はまだ浅く、当会の活動に手本はありません。また、民間ボランティアによる運営も初めてのことと思います。一つ一つが手探りの毎日ですが、規模の小ささを活かし、有機的な交流を念頭に置いています。場の創造には大いにやりがいを感じています。少し先の目標は、関東にも「仏教国際交流」の種まきを図ることです。国際法会の開催を希望して下さっているお寺様もあります。コーディネーターとしてお力添えくださる団体様・個人の方がおられましたら、ぜひお力添えをお願いいたします。これからも、日本を土台とした仏教国際交流の発展に貢献できれば幸いです。

「サンギーティの会」HP <http://michinori.hp2.jp/>
フェイスブック 「仏教国際交流会（サンギーティの会）」
加藤メールアドレス hotokeno_mitinori@yahoo.co.jp
加藤悦子（仏教会会員）

～韓国滞在記③～

—買い物：論山からソウルまで—

外国に長期滞在する場合、日本で使っていた品をすべて持って行くことは不可能です。でも韓国は、生活様式が日本にかなり近いので、衣類や日用品などを地元で買ったとしても、それほど違和感があるわけではありません。ソウルなどは至るところにコンビニやファストフード、コーヒーショップなどがあり、日本とほぼ変わらない状

態です。そういう意味では、日本人には比較的暮らしやすいのではないかと思います。

とはいえ、私の暮らす金剛大学には、別の問題が存在します。それは、大学の位置が論山（ノンサン）市中央部から離れすぎていて、買い物にすること自体がかなり面倒ということです。学校のそばにはバス停があり、近くにある新元寺（シヌオンサ）と市中央の論山駅とを結ぶ市内バスが1日に11本通過します。学内には小さなコンビニのような売店があり、必要最低限の生活用品やお菓子・ドリンク類は買うことができますが、「売店にはない品がほしい」、「ちょっとおいしいものでも買ってきたい」…とか思うと、論山市内まで行かなくては店がありません。所要時間は40から50分で、市内にある大型スーパーへは別のバスに乗り継いでさらに5分ほどかかるため、だいたい片道で1時間半ほどかかります。交通機関の利用時には韓国語の能力も多少求められるため、赴任した当初はスーパーに行くだけで非常に苦労しました。



それでも何とか買い物を重ねると、論山ではほしい品が手に入らない、ということも起きてきます。そういう場合は、学生たちに紛れて週末（金～日曜）に大学を発着する無料のスクールバスを利用し、鷄龍（ケリョン）山を越えて東にある大田（デジョン）市まで足を伸ばします。大田市には百貨店やカフェ、おしゃれな雑貨店、さらにはユニクロやZARAなどもあります。学生たちも週末に自宅に帰らない時には、このバスで大田まで遊びに行ったりしているようです。

大田でもほしい品が買えない時には、最後の手段として、ソウルに行くこともあります。こうなると、買い物よりも観光の方がメインになりますが、だいたい金曜や土曜に出発、ソウルで1泊してショッピングや寺社巡りをし、翌日学校へ戻る、という日程です。最近では、先日の9月30日がチュソク（中夕：韓国のお盆）で、その前後も含めて韓国は連休だったため、これを機に29日は明洞（ミョンドン）で買い物、翌30日にはソウル北部の山中にある道説寺（トソンサ）へお参りしてきました（写真）。韓国の仏教は日本ほど葬式と密接には関係していませんが、「田舎に帰る余裕のない人もお寺で先祖供養を」という道説寺の方針で、この日は多くの方が訪れていました。こういうあまり日本人が行かないであろう山寺で、韓国の人たちの仏教信仰に触れるのも、個人的には楽しみの一つになっています。

林香奈（金剛大学校仏教文化研究所 HK 研究教授専任研究員）

～モンゴル仏教文化圏の諸事情④～

—カラムイク共和国の仏教事情—

ロシア連邦のカラムイク共和国はヨーロッパ唯一の仏教国である。カスピ海の北西に位置し、人口は約30万人。その内半数がモンゴル系オイラト族のカラムイク人、約3分の1がロシア人である。カラムイク・モンゴル人が現在の地に住み着いてもう400年の歴史を持つ。当初現在の中国のウイグル自治区に居住していたが、内部抗争が起こり、後にロシア領内に入ることを許され、ヴォルガ川下流域、カスピ海西岸に移り住んだ。当時、ロシア帝国はイスラム教北上の防波堤として、この地域での仏教普及を容認した。キリスト教国とイスラム教国に挟まれて、宗教的に微妙な位置であるが、仏教が緩衝になって安定していた。そのため、カラムイクとは「異教徒にとどまった者」という意味を持つ。しかし、1771年、改宗圧力とロシア人の移住者に圧迫されてカラムイク人は首領のウバシに従い、父祖の地である新疆ウイグル自治区のイリ地方へ帰還を決定する。ところがその年の冬は暖冬で、ヴォルガ川が完全に凍結しなかったためヴォルガ川西岸にいた半数は取り残されることになった。この取り残された人々がカラムイク共和国のカラムイク・モンゴル人の祖先である。カラムイクの仏教文化は彼らによって守られてきた。



釈迦牟尼仏のゴールデン精舎
（ヨーロッパ最大の仏教寺院）

ロシアの公文書によるとカルムイクの仏教事情に関する記録は1616年から始まる。17世紀末及び18世紀初頭より仏教寺院が脈々と建立され始めたことにより仏教がカルムイクに深く浸透したと見られる。20世紀初頭のカルムイクでは28の大寺院、64の規模の小さい寺院が存在していた。しかし、ソ連時代になると仏教の信仰が禁止されたうえ、第二次大戦中の一時期に対独協力を図ったとして、1943年には共和国は解体され、人口の約3分の1がシベリアなどに強制移住させられ、仏教寺院はすべて破壊された。ソ連時代の末期からカルムイクは積極的にチベット亡命政府と接触し、ダラムサラなどへの学僧の派遣、学問の高いチベット人僧侶の招聘などの交流を始めた。カルムイク共和国のサルサン・イリュムジーノフ大統領時代には、55の礼拝所と32の寺院が建立された。1992年テロ・トゥルク・リンポチェはカルムイク共和国の最高仏教指導者に選ばれた。テロ・トゥルク・リンポチェは、1972年アメリカのカルムイク・モンゴル人移民家族に生まれ、6歳の時に、インドに渡り以降13年間チベット仏教を勉強した。後に彼は、インドの偉大な聖人ティロパ(Tilopa、過去内モンゴルに2回、モンゴル国で3回生まれ変わったとされている)の生まれ変わりである事が認定された。彼の指揮の下で、カルムイク全国の30以上の仏教寺院が修復され仏教文化も復興しつつある。

オーダム (大学院仏教学専攻博士後期課程3年)

～タイの仏教事情⑫～

—タイの寺院 (1) —

これまで、タイにおけるパーリ仏典の翻訳・出版について紹介してきましたが、今号からはタイの寺院について触れてみたいと思います。

タイの寺院は宗教的な役割だけでなく、国民の日常生活（例えば、祭り、集会、交流場など）と深く関係しています。昔、寺院は子供の学校として、おとなにはお坊さんからいろいろな知識を得る場所として利用されていました。そして、今から約120年前、ラーマ5世の時代に国民のために境内に学校が建てられるようになりました。今でも寺院に所属している小・中・高校は数多くあります。また、タイ人にとっては寺院を建立するために寄進することは、大きな功德を積むこととされています。

寺院の種類

寺院には本堂のある寺院と、本堂がなく僧侶の住居である《サムナックソン》という寺院があります。サムナックソンでは、本堂がないため出家式などの重要な儀式(kamma, 羯磨)は行えません。ほとんどは森林や山などにあり、主に瞑想センターとなっています。

また、寺院には普通の寺院(ワットラート)、即ち庶民が建立した寺院と、王室寺院(ワットルワン、プラアーラムルワン)、即ち王室が建立、お世話している寺院があります。当然、王室寺院のほうが位が上となります。王室寺院は、さらに上・中・下の三つの位に分かれています。それぞれ宗教的儀礼を行う場として利用されるだけでなく、特別な役割も果たしています。最上位の王室寺院は、国王の納骨の場所として(詳細については次号に)、中位の王室寺院は重要な仏塔を建立する場所として、低位の王室寺院はそれぞれの都市の代表寺院となっています。現在タイ国にある王室寺院の数は約200で、その他寺院をあわせるとタイ全国には約30,000寺に上ります。

チャックリー王朝の各王の寺院

現チャックリー王朝のラーマ1世からラーマ5世までの国王は寺院を建立され、それぞれの国王の寺院が次のように決められています。

ラーマ1世:ワットポー、ラーマ2世:ワットアルン(あかつきの寺)、
ラーマ3世:ワットラーチャオーラサーラム、ラーマ4世:ワットラー
チャプラディットサティットマハーシーマーラム、ラーマ5世:
ワットラーチャボーピットサティットマハーシーマーラム

ラーマ5世の時代には、ワットラーチャボーピットと、ワットベンチャ



ラーマ5世が建立した
ワットラーチャボーピット

マボーピット（大理石寺院）が建てられました。ラーマ 5 世の寺院になったのは時代の初めごろに建立されたワットラーチャボーピットです。

ラーマ 6 世の時代からは、寺院の修復のみとなり新規の寺院建立は現在までありません。次号では、国王が納骨されている寺院などについて紹介したいと思います。

（この記事は、1988 年にチュラーロンコーン大学成人教育センターにより出版された『タイ文化の魅力 歴史美術 建築 他 観光ガイドの手引き』pp.85-86 を参考にして執筆したものです。）

プラチャップン（大学院仏教学専攻博士後期課程 3 年）

日印国交樹立 60 周年記念事業

インド伝統武術 カラリパヤットゥ公演

10 月 3 日、東洋大学白山キャンパス井上円了ホールにて、日印国交樹立 60 周年記念事業インド哲学科主催「インド伝統武術 カラリパヤットゥ公演」が行われた。カラリパヤットゥの「カラリ」とは南西インドケーララ州の言語マラーラムで、「訓練場・道場」を意味し、「パヤットゥ」とは「武闘・鍛錬」の意味で、この地方に古代から伝わり中世以降盛んとなったといわれている。嘘か誠かわからない話だが、その昔、禅宗の開祖とされている達磨大師（ボーディ・ダルマ）は、カラリパヤットゥの使い手で、その達磨大師によってカラリパヤットゥは 6 世紀ごろ中国の少林山に伝えられ、その後の東アジアにおける武道・武術の源になったともいわれる。



今回公演を行っていただいたのは、J.B.R. Kalari Sangam の皆様で、団長の J. Baburajan 氏をはじめとした計 10 名のカラリパヤットゥ武術家の方々だ。公演が始まるとインド的な音楽に合わせて、二人、もしくは三人で 2~3 分ずつ順々に型をみせていくのだが、その迫力が凄い。舞台上で跳躍しながら、素手で戦っていたかと思えば、今度は模造の武器を手に死闘を見せる。武器の種類は剣、棒、斧など様々だが、団長の扱っていた武器が面白く金属でできた鞭のようなもので、それを振りまわす動きは早すぎて目で追えないくらいだ。途中その武器が勢いに耐え切れず千切れた瞬間、前から二列目の席で鑑賞していた私のほうに破片

が飛んでくるのではないかとハラハラしたものである。公演は 2~3 分ずつのものが一時間のうち計 26 回にも及び、拍手喝采で幕を閉じた。当日はあいにくの天候ではあったものの、それでも多くの人に足を運んでもらえて感謝している。私も、なるほど、これがインド武術の神髄であるか、などと感心しながら知った気になって満足していたが、後で聞いた話では、会場の円了ホールは舞台が木造りのため、本来は床に投げつけるはずの武器を、舞台が傷つかないよう優しくそっと置くなど、公演者の方々にはご配慮いただいていたそうである。つまり、もしもっと公演にふさわしい舞台なら、さらに迫力があったということだ。これだけでも十分なのに、まだこの上があるというのか。機会があったら、ぜひカラリパヤットゥの真骨頂を味わってみたい。

鈴木洋志（文学部インド哲学科 3 年）

～「日本文化と仏教」⑩～

宮澤賢治の「フクロウのお経」

仏教会会員 作家 永田道子

いま、宮澤賢治の「雨ニモマケズ」の詩が東北復興の祈りの言葉として、ふたたび注目されている。

雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ 慾ハナク 決シテ瞋ラズ
イツモシヅカニワラッテキル 一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ野菜ヲタベ アラユルコトヲ ジブンヲ
カンジョウニ入レズニ ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ 野原ノ松ノ林ノ陰ノ 小サナ萱ブキノ
小屋ニキテ 東ニ病氣ノコドモアレバ 行ッテ看病シテヤリ……(中略)……ヒデリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ ミンナニデクノボートヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ
サウイフモノニ ワタシハナリタイ (『宮澤賢治全集』ちくま文庫 以下同)

この詩は賢治の死後、愛用のトランクの中から発見された手帳に書きつけられていたもので、生前発表する意思はなかった。現行は「ワタシハナリタイ」で終わっているが、実をいえば手稿には続きがある。中央に南無妙法蓮華經と大きく記し、その右側に、南無無辺行菩薩、南無上行菩薩 南無多宝如来、左側に、南無釈迦牟尼仏、南無淨行菩薩、南無安立行菩薩、と日蓮宗で二尊四士とよぶ本尊の形式で記しているのである。宗派色が強すぎて学校で教えるににくいと、近代文学が宗教色を極力排するようになったせいで削除されてしまったのだが、手帳は死去の2年前、病に倒れて死を覚悟した頃に使っていたもので、つまり、「ワタシハナリタイ」のは現在の人生での願望や決意ではなく、そういう人間に生まれ変わりたいという意味なのだ。

賢治は明治29年(1896年)8月、岩手県稗貫郡花巻町(現花巻市)の古着商と質屋を営む裕福な商家の長男に生まれた。その二ヶ月前に明治三陸大地震が起きて東北地方は大津波による甚大な被害に見舞われ、しかもその夏はひどい冷夏で稲が実らず、大雨風で北上川が氾濫して家や田畑が流され、赤痢が蔓延するありさまだった。当時の東北は大凶作による飢饉がしばしば起こり、早魃や暴風雨による大災害が絶え間なかった。

父は講師を招いて勉強会をするほど熱心な浄土真宗の信者だったから賢治は宗教的な雰囲気の中で育ったが、病弱だったのと、困窮する農民相手の家業に人の世の苦しみと悲しさが植えつけられたのかもしれない。

尋常小学校の頃は教師の影響で童話に親しみ、植物や昆虫、鉱物が大好きな少年だった。旧制盛岡中学に進むと、地質学に興味をもって野山を探索し、坐禅や哲学書を読み耽る思索的で感性豊かな青年になったが、舎監に反抗して退寮させられる激しい一面もあった。

法華宗との出会いは、卒業間際に腸チフスで二ヶ月間入院したせいで進学できず、やむなく家業を手伝って鬱々としていたとき、島地大等編纂の和訳「妙法蓮華經」を読んで感銘を受けたことからだったという。彼はなぜ、法華經に惹かれたのか。法華經の壮大な物語性、個性的な登場人物、抒情性豊かな風景描写。彼の童話の世界と通ずるものがあるように思える。悪人も強欲な者も愚かな者も純朴な者も皆、哀しいほど滑稽な凡夫たちなのだ。

のちに父に日蓮宗への改宗を迫り、受け入れられないと家出して上京してしまったほどの賢治だが、研究者がいうほど深刻な父子の確執ではなかったようだ。ものごころついたときから馴れ親しんだ浄土思想は彼の骨身に沁み込んでいたのであろう。童話「二十六夜」はそれを主題にした梟(ふくろう)たちの物語である。

旧暦六月二十四日からの三夜、北上川を見下ろす森の木に、梟の僧正の説法を聴聞しに梟たちが集まっている。僧正はこぼこぼとくぐもった声で梟鴉守護章(梟鴉救護章)というありがたいお経を読み始めた。

「爾(そ)の時、疾翔大力(しつしようたいりき)、爾迦夷(るかゐ)に告げて曰く、諦(あきら)かに聴け、諦(あきら)かに聴け。善く之を思念せよ。我今汝に、梟鴉諸(けうしもろもろ)の悪禽、離苦解脱の道を述べんと。

爾迦夷、則ち両翼を開帳し、虔(うやうや)しく頸を垂れて座を離れ、低く飛揚して疾翔大力を讃嘆すること三匝(さんせう)にして、徐(おもむろ)に座に復し、拝跪して唯願ふらく、疾翔大力、疾翔大力、たゞ我等が為にこれを説き給へ、たゞ我等が為にこれを説き給へと。

疾翔大力微笑して、金色の円光を以て頭に被れるに、その光遍く一座を照し、諸鳥歡喜充滿せり。則ち説いて曰く、汝等審(つまびらか)に諸の悪業を作る。或は夜陰を以て小禽の家に至る。時に小禽既に終日日光に浴し、歌唄跳躍して疲労をなし、唯唯甘美の睡眠中にあり。汝等飛躍して之を握(つか)む。利爪深くその身に入り、諸の小禽痛苦又声を発するなし。則ち之を裂きて擅(ほし)いままに噉食(たんじき)す。或は沼田に至り、螺蛤(らかふ)を啄(つば)む。螺蛤軟泥中にあり、心柔輒(にうなん)にして、唯温水を憶ふ。時に俄に身空中にあり、或は直ちに身を破る、悶乱声を絶す。汝等之を噉食するに、又懺悔の念あることなし。

斯(かく)の如きの悪業、挙げて数ふるなし。悪業を以ての故に、更に又諸の悪業を作る。繼起して遂に竟ることなし。昼は則ち日光を懼れ、又人及諸の強鳥を恐る。心暫らくも安らかなることなし。一度梟身を尽して、又新に梟身を得。審に諸の苦患を被りて又尽くることなし。」(ルビは原本どおりの旧仮名遣い。適に省略)

梟僧正はこんこんと諭す。

「みなの人衆、よく心を留めて聞かしゃれ。折角鳥に生れて来ても、たゞ腹が空いた、取って食ふ、睡くなつた、巢に入るではなんの所詮もないことぢやぞよ。それも鳥に生れてたゞやすやすと生きるというても、まことはたゞの一日とて、たゞごとではないのぞよ。こちらが一日生きるには、雀やつぐみや、たにしやみゝず、十や二十も殺されねばならぬ、たゞ今のご文にあらしゃるとほりぢや。こゝの道理をよく聴きわけて、必らずうかうか短い一生をあだにすごすではないぞよ。」

疾翔大力は施身大菩薩(捨身菩薩)のことで、もとは小さな雀であったが、陸奥が飢饉で人々が苦しんでいたとき、わが身を捨てて人間の親子を救った。その功德によって仏に遭い、ついには法力を得て大力の菩薩になった、

また爾迦夷ももとは彼らとおなじ森に住む梟だったが、早くから梟の身のあさましさを覚悟して出離の道を求め、その一心の甲斐あって疾翔大力にめぐりあい、その教を聴聞してついに天上にいたった。梟たちは上人と敬い、今でも祥月命日には各家で楡の葉を捧げて供養している。

説法の際には、穂吉(ほきち)という小さな子供の梟が父母や兄たちと一緒に聴聞していた。他の子らが説教に飽きて蝙蝠(こうもり)の真似をして枝に逆さにぶるさがつたり、翼を広げてバサバサ羽ばたいてみたりしたあげく、こっそり抜けだしてしまったのに、穂吉だけは兄たちの分までとじっとおとなしく聞き入っていた。

ところがその翌日、穂吉は草刈りにやってきた人間の子供につかまり、その農家で捕われの身になってしまったのだ。穂吉の母梟や女たちが絹を裂くような悲しい声で泣くなか、様子を見に行く父親に祖父は「殺されぬためにおとなしくして人間に噛みついたり逆らってはならぬ。」と伝言を頼み、僧正もこう伝言した。「こんなひどい目に遭うのは何か悪いことをした報いなのだ。恨んではならぬ。この世の罪も数知らず、さきの世の罪も数かぎりないから、この災難もあるのだとよく諦めて、あまり嘆いてはならぬ。あまり泣けば心も沈み、からだを損ねる。いつも気軽にしていることじゃ」

三日目の夜、説法の枝に穂吉の姿があったが、大怪我を負っていた。人間の子供は飽きて逃がしてくれたはいが、空へ放す際、ポキッと脚を折ったのだ。脚を折られては飛べない、枝にも止まれない、萱原に落ちて泣いているのを発見されて連れ帰ってもらえたが、瀕死なのにどうしても説教が聞きたいとねだったのである。

梟たちは復讐しようといきり立つ。屑焼きの晩、火のついている藁をあの子供の家の茅葺屋根に落として火事にしてやろう、いや、もっとひどいことをしてやらねば気がすまぬ、赤子の頭を突いてくれよう、などと相談していると、僧正はずかしく諫めた。「それでは血で血を洗ふ。こなたの胸が霽(は)れるときは、かなたの心は燃える。いつかはもっと手ひどく仇を受ける。この身終つて次の生まで妄就は絶えず、ついには共に修羅に入る。」

穂吉は意識を失いかけながら、それでも父や母に励まされるとぱちっと目を開け、説法を聞き入っている。

やがて、桔梗色の空に月が昇った。それは不思議な黄金の船のようで、舳先から花火のように紫のけむりが噴き出し、たなびいて雲になるや、その紫雲に乗って金色にかがやく疾翔大力が二人のお供を従えて近づいてきた。疾翔大力が左手を上げて招くようにするとなんともしえない芳香があたりを満たし、穂吉は息絶えた。その顔はかすかに笑っていた。澄みきった夜空、二十六夜の細い月、きらめく星々、ごとごとと遠くに響く夜汽車の音。

子供の面白半分の行為によって理不尽な死に追いやられた哀れな穂吉を、阿弥陀如来と観音・勢至両菩薩を思わせる三尊が来迎して浄土へ連れて行ってくれる。これは明らかに観無量寿経のイメージであり、冒頭の「諦に聴け、諦に聴け。善く之を思念せよ。」も観無量寿経のフレーズである。穂吉が笑みを浮かべて死んだのは臨終正念であろう。ある本は、この童話は賢治の「反浄土」のふざけすぎのパロディで、読者はこれで穂吉の哀れな死を納得できるか(大角修『イーハトーブ悪人列伝』)というが、どうであろうか。

《書籍・イベント情報》

○《書籍》

・『仏教心理学キーワード事典』

井上ウィマラ・葛西賢太・加藤博己/編（春秋社 3990円）
ひとりの悟りから万人の気づきへ。古来からの叡智と、現代の知見とを融合させ、人間的成長と社会貢献への道を模索する仏教心理学、その基本用語を厳選し、融合の成果を提示。日本仏教心理学会推薦。

・『パーリ仏典にブッダの禪定を学ぶ』

片山一良/著（大法輪閣 2625円）
ブッダが比丘たちに説いた『大念処経』（マハーサティーパーターナ・スッタ）には、四種の修業の仕方から四諦・八正道といった、仏教の基本となる実践方法が説かれており、それを定評ある訳と分かり易い解説をほどこす。

・『日本の仏教と文学』

白土わか/著（大蔵出版 4725円）
伝来し学んだ仏教が、芸術の理念へ、そして民衆の信仰へ、日本人の情操によって独自の形を成していく——その跡を数多の文学作品の中に追う、文化基層から見る日本仏教論。

・『世親浄土論の諸問題』

小谷信千代/著（東本願寺出版部 3675円）
『無量寿経優婆塞願生偈（浄土論）』に説かれる天親菩薩世親の浄土思想を考察。山口益博士の講義録をもとに書かれた『世親の浄土論』から、宗祖聖人の往生思想の理解にも関わる、さらに検討すべき課題を解説。

・『日本人の死生観を読む』

島蘭進/著（朝日新聞出版 1470円）
明治武士道から「おくりびと」へ。幅広く活躍する宗教学者が、柳田国男・折口信夫、吉田満、宮沢賢治などの作品をもとに、日本人の死の受容の変遷を読み解く。

・『絵から読み解く日本仏教』

加藤みち子/著（山喜房佛書林 1575円）
日本人の仏教を、絵や図を用い、しかも中国仏教と比較するというスケールの大きいヴィジョンから読み解く前例のない日本仏教概論。神道と仏教の混淆という視点から日本仏教を捉え直す。

○《イベント》

《イベント》

10月から12月にかけて行われる仏教イベントを紹介します。実りの秋に相応しく、興味深い展覧会が多く開催されていますので、ぜひご参加下さい。

● 三井記念美術館 特別展「琵琶湖を巡る 近江路の神と仏 名宝展」

琵琶湖を巡る近江の古社寺に伝えられた秘仏、名宝を一堂に展示する、東京で開催される初めての大展覧会。延暦寺、園

城寺（三井寺）、石山寺などの古社寺から、仏像、神像、仏画、垂迹画、絵巻物、経巻、工芸品など、国宝6点、重要文化財56点を含む約100点の名宝が出品される。

日時：9/8（土）～11/25（日）

10時～17時（入館は16時30分まで）

住所：中央区日本橋室町2-1-1 三井本館7階

観覧料：一般1200円、学生700円

※休館日は月曜日です。月曜が祝日のときは火曜が休館となりますので、ご確認ください。

● 東京都教育委員会主催「東京文化財ウィーク2012」

文化の日を中心に都内全域の文化財の公開や文化財に関わる様々な企画事業として、通常は公開されていない国及び都指定の文化財86件を一斉公開する。東京で唯一の木造建造物の国宝である正福寺（東村山市）の地藏堂や、増上寺（港区）の経蔵、性翁寺（足立区）の阿弥陀如来坐像、明王院（足立区）の如意輪観音菩薩坐像など、貴重な文化財に触れる機会です。

日時：10/27（土）～11/4（日）

問い合わせ先：教育庁地域教育支援部管理課

電話 03-5320-6862

※公開日時がそれぞれ違いますのでご確認ください。

● 妙定院展2012「応挙の釈迦図—仏教のはじまり—」

日本画壇の巨匠の円山応挙の画である妙定院『出山釈迦図』。応挙が仏画を手がけたのは極めて稀で、本作品が港区文化財に指定されたことを記念して、特別公開される。併せて、『涅槃図』や『釈迦十六善神像』などの仏教美術の名作群を紹介する。

日時：11/2（金）～11/4（日）

10時～16時

観覧料：無料

住所：港区芝公園4-9-8

● 東京国立博物館140周年 古事記1300年・出雲大社大遷宮

特別展「出雲—聖地の至宝—」

今年はお出雲を舞台とした神話や出雲大社創建について語られている『古事記』が編纂されて、ちょうど1300年の記念の年にあたり、出雲大社では本殿などの修復や、御祭神を本殿に遷座する「平成の大遷宮」が行われています。これを機に出雲大社の宝物をはじめ、島根県を代表する文化財の展示を通して、独特の文化を形作った聖地、出雲を紹介する。

日時：10/10（水）～11/25（日）

観覧料：一般800円、学生600円

会場：東京国立博物館 本館特別5・4室

※休館日は月曜日です。

～ 東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ～

・東洋大学仏教会・仏教青年会広島研修

—不動院安楽寺を中心とする安芸の国宝巡り—

日時：2012年11月1日（木）～11月3日（土）

費用：45,000円（交通費＋宿泊費）概算です。

現地集合：11月1日（木）11：45分

JR 広島駅南口改札出口（1階）

訪問先：不動院・宮島・厳島神社・弥山（大聖院）

宿泊地：広島ガーデンパレス、休暇村大久野島泊

今年度は印哲卒業生の麻生さんが副住職を勤める不動院、世界遺産に登録された宮島・厳島・弥山など安芸国宝の寺社を巡る研修です。不動院は安国寺恵瓊ゆかりの寺で、二つの国宝や数多くの重要文化財を有する広島の名刹だそうです。詳細につきましては下記HPをご覧ください。

不動院 <<http://www.ttec.co.jp/~fudouin/>>

宮島・厳島神社 <<http://www.miyajima-wch.jp/>>

弥山（大聖院） <<http://www.galilei.ne.jp/daisyoin/>>

・東洋大学仏教会・仏教青年会忘年会

日付：12月25日（火）

時間：18：30-20：30

場所：仏教伝道協会

レストラン菩提樹 <<http://r.gnavi.co.jp/a076100/>>

※詳細につきましては日が近くなりましたらお知らせいたします。

《語学勉強会》

※勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先をお願いいたします。（会員は無料で参加できます。）

○仏教漢文講読会

講師：橋川智昭

日時：隔週木曜 4-5限

『大乘起信論』を読みながら漢文の読み方と仏教の思想を学びます。参加希望者は橋川<kitsukaw@ff.ij4u.or.jp>までご連絡下さい。

○サンスクリット文献勉強会

講師：出野尚紀

日時：隔週水曜日の6限

『アヴァダーナ』を読みます。初心者大歓迎です。参加希望者は<li1000041@toyo.jp>までご連絡下さい。

○チベット文献講読会

講師：石川美恵

日時：隔週月曜 18：30～20：00

会場：6号館4階6408教室

内容：ツォンカパの『ラムリム』「菩提心の儀軌」の章を読みます。チベット語初心者も歓迎です参加希望者は石川<danakoshajp@yahoo.co.jp>までご連絡下さい。

※随時会員を受け付けています。入会希望者は下記までご連絡下さい。会員規約・活動内容・受付手続きなどの詳細はホームページ<<http://www.toyo-yimba.org>>をご覧ください。また、紹介したい行事や掲載したい記事などがございましたら、このアドレスまでご一報下さい。

編集後記

本号より新しく「まいとりの」編集長を務めさせていただきます鈴木です。今回発刊にご協力いただいた皆様には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。精一杯つとめますので、今後ともよろしく願いいたします。

編集責任者：文学部インド哲学科3年 鈴木洋志

東洋大学仏教会

卒業生、一般：年会費 3000円、特別賛助一口 5000円

東洋大学仏教会事務局長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学インド哲学科第8研究室気付

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: tba.bussei@gmail.com

東洋大学仏教青年会

学生：年会費 1000円

東洋大学仏教青年会会長 藤森晶子

db1000016@toyo.jp

URL: <http://www.toyo-yimba.org>